

## 展示記録

## 「学徒」たちの「戦争」 —東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員—

永田 英明

### 展示会の趣旨と概要

東北大学史料館では、平成17年11月1日（火）から翌年2月24日（金）にかけて、主に「学徒出陣」と「学徒動員」に焦点をあてながら、本学にまつわる戦争体験を紹介する展示会「「学徒」たちの「戦争」—東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員—」を企画・実施した。

戦没学生の手記『きけ わだつみのこえ』に代表されるように、学生たちの戦争体験は戦後一貫して強い社会的関心を集め続けてきた。しかしその歴史的事実としての検証作業自体は、戦後六十年を経た現在でも必ずしも十分になされているとは言い難い。その中で近年、各々の大学での実態調査も進められつつある。東北大学におけるその実態調査は殆ど行われていない状況であるが、当館には、当時の学生たちの生の声、その他さまざまな実態をうかがうことができる資料が豊富に蓄積されてきており、その一部は以前より常設展示のなかでも紹介してきた。戦後六十年を契機にあらためてこれらの資料をまとめて紹介することで、本学の戦争体験に関する資料を整理しこれを広く共有する必要があるのではないかと考え、この展示会を企画・実施するに至った。

### 展示に伴う調査

展示会開催にむけて、当館をはじめとする本学学内に存在する学徒出陣・学徒動員関係資料の再調査と分析を進めた。なかでも重点的に行ったのが、「学徒出陣」に関する資料の精査と、法文学部の伊勢崎動員に関する資料の調査分析であった。またその過程で、当館所蔵中村吉治文書に含まれて

いる、入営を控えた学生のレポートの筆者の一人である、法文学部卒業生・池田重隆氏への取材が実現した。この取材に際しては、河北新報社及びミヤギテレビの記者が同行し、三者による共同取材を行った。その様子については『河北新報』7月29日朝刊、およびミヤギテレビ番組「OH! バンデス」における特集「みやぎ戦後60年の記憶」の一環として報道された。

### 展示の内容

展示は、時間軸とテーマを絡み合わせる形で、以下の五部から構成した。

#### I 「深まる戦時色のなかで」

…日中戦争開始以後、学徒出陣までの大学と戦争の関わりについて

#### II 「学徒、出陣す」

…昭和16年の繰上卒業から18年秋の「学徒出陣」までの経緯と、学徒出陣の実態について

#### III 「学徒勤労働員」

…昭和19～20年における通年勤労働員の実態について

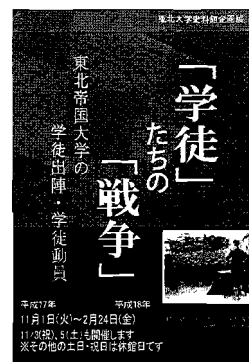
#### IV 「空襲と大学」

…大学の疎開と仙台空襲

#### V ふたたび、学園へ

…戦争終結と戦後復興

このうち中心となったのが、II・IIIの部分であり、「学徒出陣」・「学徒動員」に関する数多くの資料をここで紹介した（詳細は後掲の展示資料目録参照）。展示資料の多くは当館



の所蔵資料であるが、その他に展示会にあわせて数名の方々より資料の提供をいただいた。

また同時に学内公文書や刊行物・新聞資料等の精査によって学徒出陣・学徒動員に関する具体的なデータを作成することに努め、その成果をパネル展示として紹介した。

### 来館者とアンケート結果

展示会は約3ヶ月にわたり実施し、期間中は11月3日(水・祝)および11月5日(土)も休日開館を行い、研究員による展示解説会を実施した。期間中の公開日数は77日となった。期間中の展示見学者は814名にのぼった。

また展示室にアンケート用紙を置き、調査を実施した。回答状況は以下の通り。

#### ①回答者の身分

卒業生	30
学内者	16
教員	4
事務職員	2
学生・院生	7
その他	3
その他	66

#### ②今回の企画展開催を何で知りましたか。

ポスターを見て	45
新聞・テレビなどで	32
その他	34

#### ③展示の内容はいかがでしたか？

おもしろかった	96
ふつう	14
無回答	4

#### ④特におもしろかった(つまらなかった)点(主なものを抜粋)

・写真があるので、当時の風俗をイメージしやすかった。文書の方も翻刻を添えてあって、わかりやすかった。動員先での雑感などは、まとめて全部読んでみたい。

・学徒出陣する前の学生たちの感想文を読

んで、今の平和な生活ができるのも、あの方々の犠牲の上にあるとつくづく感じた。

・「勤労働員と大学教育に関するアンケートから」は、教育についての教授たちの多様な意見が展示されていて面白かった。

・当時の学生のレポート。出征を前にした複雑な心情がよくあらわれている。

・入営を目前に控えた学生たちのレポート。血気の若者を思い上がらせたものは何か！！当時をかみしめる世事雑感に世情の流れに屈しない英知があったことに一種の救いを感じる。

・実物(学生のレポート等)と解説の両方があったため、内容に興味を持った。

・現在と昔の片平キャンパスの地図(戦争で焼失した所と現存する所の対比)

・言葉にならないほどの思いでした。感激です。有難うございました。

・戦時中の歴史が思い出され、なつかしかった。戦後包摂校の展示よかったです。

・桑原武夫の疎開に関する回想。法文学部の疎開で栗原郡文字村に行ったとき、大学を理解してもらえなかったこと。

・入営を目前に控えた学生達のレポートは勉強になりました。私とは20才は年上の人達で心境はそんなにかわりなく理解できました。それに対し、大学教師の視線の文は、大局的な文章で、現今の平和が如何に素晴らしいものか思い知らされます。

・学徒兵の心意気を感じ同世代の一人として感無量でした。再び無謀な戦争で人材が失われないことを祈念します。つまらないものはありませんでした。

・小生の土浦航空隊予科練時代、隣の兵舎が学徒隊の兵舎でした。毎日の超特別訓練にたへる学生を見て、とても気の毒な思いをしたものです。あの方々はどうなったのでせうか。八十近い今でもふと思い出します。

小生昭和2年生まれです。

- ・当時の記録。(日記、レポート etc.) 戦時下の様子が伝わってくるようだった。
- ・面白いどころではありません。涙が出て昔を思い出してとても切なかったです。私も男だったら今頃は、あの世で泣いている事と思います。
- ・経済史受講の学生のレポート、壽岳章子氏の両親への手紙(直接、お三方とも存じ上げている)。
- ・熊谷総長の全教官へのアンケート。代表的意見だけですから、全部を読ませて価値が出ると考えます。(あの戦争と大学の関係をどう受け止めていたのかが、大事な点です。)
- ・御真影の奉安庫－専門家の小生も実物を見るのは初めてです(すべてがハカイされたので…)。
- ・理・工系学生の勤務動員先(大変貴重な展示です。ぜひ今後とも続けて下さい)。
- ・阿部次郎先生の講義に出られたときの壽岳章子氏の手紙を感銘深く読みました。学徒出陣の記事はいつ読んでも胸が痛みます。学問のためにも戦争はあってはならないという思いを深くしました。
- ・学生の論文(レポート)、当時の学生の心情、各学部教授の学徒動員に対する考え。
- ・東北帝大学生の勤労働員先が、県内だけではなく日本各地であったことを知った。
- ・入営を控えた学生の手記、学徒動員に関する大学職員の見解が興味深い。
- ・切実な記録でした。春樹集は貴重な記録でした。公開されたいと思います。胸を打たれます。私も旧制高校(新潟)で動員に出ましたので、思いも深くなります。この悲しみが二度とありませんように。
- ・戦争にむかう学生の気持ちが書かれていた日記。学業への思いと、これからどうなるかの不安、国家が国民を強制する時の学生の実感が伝わってきました。くり返させ

たくない歴史です。

- ・戦時中に学生がどのような考えを持っていたのかが、当時の日記から知ることができて良かったと思います。
- ・参考図書コーナーの書物には、大変面白いものがありました。感謝。
- ・出張で東京から来て時間があつたので、来たらやっていた。壽岳章子氏の手紙。御真影奉安殿(実物を初めてみました)。
- ・昭和19年、学徒出陣で軍隊の中で東北大卒の方々と一緒に生活していたので、訪れました。
- ・(面白いという言葉で表現できないが)戦争が大学生に及ぼした事、戦争をすることのどうしようもなさを学生の生の声(書き物にすることから抑えた表現ではあるが)を目にし、じかに感じることができた。
- ・資料の保存と解説がていねいで良い。
- ・良い資料を多数拝読しました。今後もガンバってください。
- ・大学生は入学し勉強しないままに兵士として戦場に送られていたことがわかった。様々なことがわかって楽しかった。
- ・中島飛行機における、学生側の主張が特におもしろかった。
- ・雨の神宮。早慶壮行野球だけでなかった。工学部の集団勤労奉仕。
- ・御真影奉安殿や仙台空襲の展示(当時10才、南材木町国民学校)。
- ・平和憲法のもつすばらしさを、改めて思いました。まだまだ勉強したかったであろう気持ちがじんわりと伝わってきます。再び、若者が軍にとられることのないように。
- ・戦時中のことは知らなかったもので、はじめて知ることでばかり。資料もよく残されていたものと感心します。もう少し当時の学生の書いたものなど集められたら、なお一層良くなっていると思う。
- ・二度目の参観です。前になかった資料も

出ていて良かったです。包摂校の戦時動員資料はないのでしょうか。

- ・学徒動員に関わって、理系、文系間で学生及び教職員の見解に明確な違いが見られたのが、とくに興味深かった。

- ・想像力を引き出してくれる、ポイントをおさえた良い展示と思いました。出陣学徒の手記が印象的ですが、ガラスケースの底にあるので、読みづらく、パネルも少し遠いのがざんねんです。教授の先生方の学生への言葉、姿勢も興味深いです。個人情報になるかもしれませんが、書かれた方が戦争から無事に復員されたかどうかもやはり気になりました。陸軍の計算の動員で数学科に来ている女専の生徒さんたちがとてもかわいい！たいへん印象的でした。

- ・寄せ書き日章旗、尽忠報国に高橋里美、阿部次郎、大類伸、古田良一、土居光知、村岡典嗣、中川善之助、金倉円照各師の名が見えたこと。

- ・勤労報国隊会計簿が存在し、報償金受入状況が詳細に分かったこと。

#### ⑤史料館への要望（抜粋）

- ・機会をつくり、このような企画展や休日開館をして頂きますようお願いいたします。

- ・もっと宣伝しても良いと思います。

- ・学生たちのレポートの展示には、ワープロで打ち直したものが添えられていたが、不要ではないのか。誤植もいくつかあった。

- ・感慨を掘り起こす史料展示は有難い。願わくは記念誌にまとめたものはできか。

- ・東北大の学生の召集出征の手記等期待していたがなくて残念でした。

- ・内容の展示はされていなかった敗戦の原因に関する講演を展示してほしいです。

- ・漢字に読み仮名と意味をつけてほしい。

- ・よくわかったけど、もっとわかりたいです。お元気な方からの史料（ものであるとか、オーラルヒストリーであるとか）の収集を、

ぜひやっていただきたいなーと思います。

#### まとめ

アンケートの結果を通覧すると、今回の展示で来館者に最も強い印象を与えたのは、やはり入営を控えた学生の手記や、戦時下の学徒動員・大学運営に関する教師たちの意見書などといった、当事者たちのナマの声を記した文書資料であったことが知られる。こうした資料を展示という方法で紹介することには制約があり、現資料の一部分と、文章を抜粋したパネル展示という断片的な形でしか紹介できなかつたのであるが、それにもかかわらず多くの来館者が強い関心を寄せたことは、私たちの予想を上回る結果であった。同時に、これらの記録をまとめた形で翻刻・紹介して欲しい、との意見も多く寄せられ、今後こうした声にも応えていく必要がある。

本来十分な調査研究の上に展示会を実施するべきであったが、様々な制約から、調査分析という面では多くの課題を残したままの展示となった。期間中に来館者等からご教示いただいた点も含め、今後さらに調査研究の蓄積を期したい。

なお、戦後60年ということもあり、この年から翌年に掛けては他大学でも学徒出陣や学徒動員に関する調査研究や展示会の開催などが行われている。例えば京都大学文書館では、総長裁量経費プロジェクトして実施した京都大学における「学徒出陣」の調査研究成果をもとに、「京都大学における「学徒出陣」展を平成18年1月17日から4月2日まで実施し、明治大学史資料センターでも「明大生と学徒兵」展を2006年7月1日から8月18日まで実施した。こうした動向については、『歴史評論』683号(2007年3月)にて山辺昌彦氏がとりあげられるところとなっている(山辺昌彦「平和のための博物館」の今)。

## 「学徒」たちの「戦争」－東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員

### 展示資料目録・解説

#### －解説パネル・展示キャプションより－

### I 深まる戦時色のなかで

昭和6年(1931)にはじまるいわゆる十五年戦争は、昭和12年(1937)7月の蘆溝橋事件を契機に日中戦争へと突入する。「国民精神総動員」が叫ばれる中、国民生活は戦時色を次第に強めていき、大学も様々なかたちで対応を迫られていくこととなる。

学生生活においては、昭和13年(1938)以降夏期休暇等における集団的勤労作業の実施が義務づけられ、東北帝国大学でも軍の飛行場建設その他各所への「勤労奉仕」が開始される。また「銃後会」「報国会」などの組織が整備され、昭和16年(1941)8月には防空訓練や非常時の動員組織として「東北帝国大学報国隊」が設置されるに至った。

また日中戦争以降、教職員の中に応召し戦地に赴く者も続出する。当時まだ学生は在学期間中の徴兵検査受検を猶予されていた。しかし応召した先輩や教職員の壮行会、あるいは卒業生などが戦地から送ってくる書信などを通じ、「戦争」や「軍隊」を自分たちに直接かかわる問題として、感じ始めていたはずである。

#### ●勤労奉仕

昭和12年(1937)8月以降、国民精神総動員運動の一環として「勤労奉仕」が推奨され、各学校での取り組みも開始される。東北帝国大学の「勤労奉仕」も昭和13年(1938)から開始され、夏休みなどの長期休業期間を利用し軍の飛行場建設や道路工事等の公共土木工事、さらには応召者のいる農家の支援などに学生を集団的に動員した。当初この勤労作業は「銃後の奉仕」や「心身鍛練」

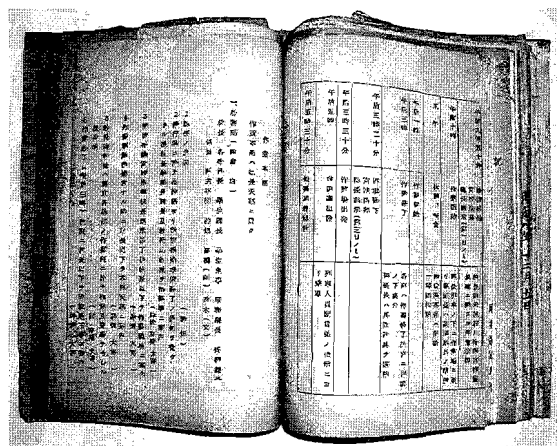
といった目的を前面に出した、教育の一環としての位置づけがなされていた。しかし戦局が悪化するのに伴い、食料や兵器の増産を支える労働力としての性格を、次第に強めていく。

#### 1. 増田飛行場勤労作業の実施要項

昭和13年(1938)9月

附属図書館移管文書『雑書類』所収

増田飛行場は陸軍飛行学校の練習基地として昭和15年(1940)に完成したもので、その跡地は現在仙台空港となっている。東北帝大の学生はこの年9月、飛行場の建設作業に三日間動員されることとなり、全学部から700名弱の学生が参加した。この文書によれば、午前七時に仙台駅に集合した彼らは増田駅(現名取駅)から隊列を組んで現場に向かい、地ならしや土砂の積み込み作業に従事することとなっている。



#### 2. 評定河原グラウンドでの勤労作業[写真]

昭和13年頃

昭和12年(1937)、文部省は「国民精神総動員ニ際シ体育運動ノ実施ニ関スル件」という文書により学校運動場等の整備を学生生徒の自力で行わせる方針を示し、各学校の運動場整備などが勤労奉仕の一環として行

われるようになった。これにより東北帝国大学も創立 25 周年記念事業で取得した評定河原運動場の整備作業に学生を動員した。

### 3. 「評定河原の学生労力奉仕」とかけて…

鈴木廉三九文書

工学部金属工学科親睦会での謎かけ問答のメモ。学生勤労奉仕に関する皮肉を込めた問答が記されている。

「評定河原の学生労力奉仕」とかけて

「釘抜き」と解く。

そのココロは…

「無理に引き出す」

### 4. 銃後奉公強化運動実施に関する通知

昭和 15 年 (1940) 9 月

附属図書館移管文書『国民精神総動員関係』所収東北帝国大学での「銃後奉公強化運動」実践スケジュールを通知したもの。10 月 7 日から 11 日までの七日間にわたり、職員・学生代表による傷痍軍人の見舞い、護国神社や軍人墓地への参拝、大学関係出征者の遺家族慰問などが行われた。

### 5. 青葉山護国神社での勤労作業 [写真]

昭和 14 年 (1939) 9 月か

『皇紀二千六百年東北帝国大学医学部アルバム』

### 6. 興亜学生勤労報国隊報告書

昭和 17 年 (1942) 3 月

旧学生部移管文書

昭和 16 年度の「興亜学生勤労報国隊」の実績報告書。東北帝大からはこの年「満洲建設勤労奉仕隊」の「医療特技隊」として 6 名の医学部学生が参加し、開拓移民の医療活動等に従事した。興亜学生勤労報国隊は全国の大学・高等学校・専門学校等の学生から募集し夏休み等を利用して「満州」等での勤労作業に従事させたもので、昭和 14 年 (1939) から編成・派遣が開始された。東北帝大からも毎年のように学生が派遣されている。

### 7. 東北帝国大学の勤労奉仕 [解説パネル]

→別表 1 に後掲

### 8. 銃と取組んで 帝大女子学生奉仕 [新聞記事パネル]

『河北新報』昭和 18 年 5 月 13 日

男子学生の教練時間を利用して東北帝大の女子学生が仙台師団の兵器部で銃の手入れを行う様子を報じた記事。

### ●軍事教練の強化

学校での軍事教練は大正期から行われていたが、大学では学科 (講義) を中心とししかも必修科目とはされていなかった。しかし昭和 14 年 (1939) 文部省は術科 (実技) を伴う教練を全学生を対象に実施することを各大学に指示し、軍部も卒業後兵役に服した際の幹部候補生資格を盾に教練必修化を迫った。東北帝国大学でも術科に使用する小銃・銃剣・軽機関銃等を急遽入手し 14 年 9 月から必修科目としての教練を開始する。その後 16 年には夏期休業期間中の短期軍事講習や野外演習など教練の内容がさらに強化された。

### 9. 医学部学生の教練風景 (1) [写真]

『皇紀二千六百年東北帝国大学医学部アルバム』

銃を右手に並ぶ学生たち。

### 10. 医学部学生の教練風景 (2) [写真]

『皇紀二千六百年東北帝国大学医学部アルバム』

馬に騎乗する教練学生。

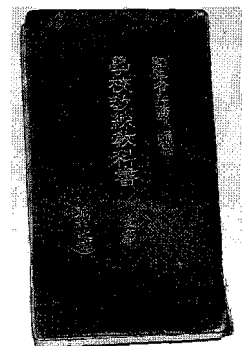
### 11. 学校教練教科書 後編 (術科之部)

昭和 17 年 (1942) 陸軍省兵

務課編

小山寿一資料 (旧制二高資料)

東北帝国大学では昭和 14 年 (1939) から教練が必修科目となり、同時に術科 (実技) も行われるようになった。



この教科書には軽機関銃・擲弾筒等の使用方法、射撃の心得や集団戦闘の方法、さらには偵察、測量術、命令報告の方法等に至る各種の事項が記されている。この教科書自体は旧制二高の生徒が使用したものだが、術科の内容を知る参考として展示した。

## 12. 法文学部経済科授業時間表

昭和15年(1940)

一年生は月曜四コマ目、二年制は木曜四コマ目、三年生は土曜の一コマ目にそれぞれ「教練」の時間が設けられていた。

## ●東北帝国大学報国隊の結成

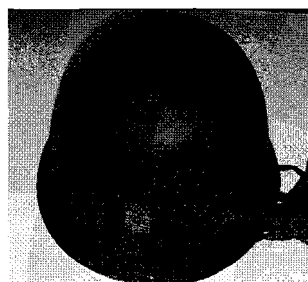
昭和15年(1940)から16年にかけて、国内の諸分野において「新体制」を標語に掲げた戦時体制の編成が進められた。文部省は学友会などの学内団体を「学校報国団」へと再編することを指示し、各大学もそれぞれの体制づくりを進めていく。

東北帝国大学では昭和16年4月に従来の銃後会や各学部学友会、運動部や文化部等を再編統合して「東北帝国大学報国会」を結成。8月にはさらに「東北帝国大学報国隊」を結成した。報国隊は各学部ごとの大隊と、専門分野の学生で編成される特技隊(防毒隊・医療隊・電気工作隊など)で構成され、防空訓練などの組織として、さらには勤労働員の組織として定着していく。

## 13. 徽章入りの防空兜

昭和14年(1939)製造

附属図書館旧蔵  
戦時中の防空訓練等で使用されたものと思われる。前面に「大学」



の徽章が入っている。徽章の上に薄く見える「図共斗」の文字は、戦後大学紛争時に再利用されたことを示す。

## 14. 防毒マスク

昭和14年(1939)製造

附属図書館旧蔵

戦時中の防空訓練等で使用されたものと思われる。東北帝国大学では昭和13年(1938)に「防護団」を結成して以来定期的に防空訓練が実施された。昭和16年(1941)に結成された「東北帝国大学報国隊」も、もともとはこうした防空訓練の組織であった。

## 15. 東北帝国大学報国会中央会規則

昭和16年(1941)

「報国会」は中央会と各学部会に分かれ、中央会には総務・教養・鍛錬・国防訓練・厚生部の5部が置かれた。基本的には従来から存在する各種の学生団体等を再編したものである。従来の各種の課外活動団体は中央会の教養部(文化・芸術系)と鍛錬部(体育系)にまとめられたが、乗馬部・漕艇部などは国防訓練部に入れられた。東北帝国大学では学生の思想問題などを契機に昭和4年(1929)に「学友会」が解散されており、それ以降学内の学生団体をまとめる組織は存在しなかった。報国会の結成は戦時体制下におけるその「復活」という側面も持っていた。

## 16. 「学生生活ニ関スル注意」(報国隊について)

昭和17年(1942)10月

『東北帝国大学学生要覧』所収

「学生生活ニ関スル注意」として記された「学生ト時局」という文章。戦時色の深まりと共に、『学生要覧』等学生への配布物の内容も変化してくる。

## 17. 河北新報記事「固いぞ学園の護り 東北帝大報国隊生る」

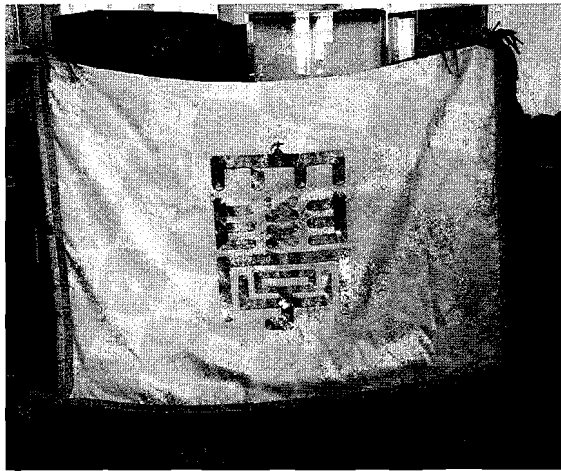
昭和16年(1941)10月8日

評定河原運動場での報国隊結成式を報じる記事

## 18. 学旗

昭和15年(1940)制定

入学式や「青少年学徒ニ賜リタル勅語奉読式」等の儀式で使用することを目的に製作された。出陣学徒の壮行式でも使用されたのであろうか。東北帝国大学では創設以来特に学旗を制定することはなかったが、昭和14年(1939)5月22日に学校教練二十五周年記念行事として全国の学生代表を集めて皇居前で行われた「御親閲拝受式」を契機に、検討が開始されたらしい。東京帝国大学が学旗を制定したものと同じ頃であった。



## ● 応召教職員・学生の増加

日中戦争開始以降、若手教職員を中心に大学関係者のなかにも応召される者が増加する。特に医学部では、助手・副手クラスを中心に軍医として入隊する者が多かった。また学生であっても徴集猶予の年齢制限を超えた学生・大学院生からは、召集され戦地に向かう者が増えてくる。

これに伴い戦死する職員・学生の数も徐々に増えていった。昭和16年(1941)10月に行われた大学教職員・学生の戦没者慰霊祭では、日中戦争以降の戦没者として18人の教職員学生の霊が祀られている。いわゆる「学徒出陣」の直前である昭和18年(1943)10月には、その数は28人にまで膨らんでいた。

## 19. 法文学部経済科の教員と学生〔写真〕

米沢治文旧蔵

附属図書館南庭での記念撮影。応召者の壮行記念写真か。

## 20. 曾我部助教授の応召を知らせる通知

昭和12年(1937)12月

附属図書館文書『雑書類』所収

法文学部の曾我部静雄(当時助教授 東洋史)の応召に際しその出発日時を知らせる通知。

## 21. 曾我部助教授に送られた寄書き日章旗

昭和12年(1937)12月

曾我部静雄資料

法文学部の同僚や学生から送られたもの。

## 22. 応召職員からの書簡

昭和13年(1938)5月

附属図書館移管文書『雑書類』所収

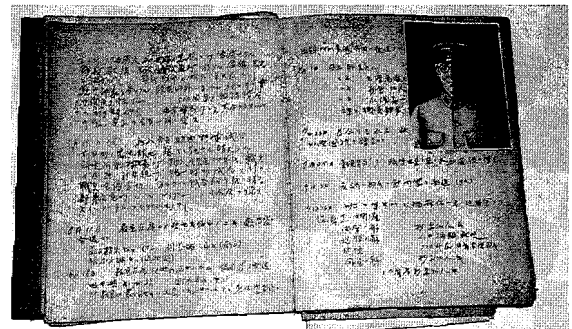
応召中の元図書館職員からの書簡。入隊間もない頃の軍隊生活について知らせたもの。

## 23. 生物学教室の日誌

昭和17年(1942)

理学部生物学教室文書『生物学会記録』

出征中のOBへの慰問袋発送、臨時召集となった副手へ贈る国旗の製作などの記事が頻繁に見える。研究室に居る学生たちにも戦争の足音は近くに聞こえていた。



## 24. 応召教職員・学生数の推移

→別表2に後掲

## 25. 戦没者数の推移(慰霊祭での対象者数)の推移

→別表3に後掲



## II 学徒、出陣す

昭和16年(1941)、対米戦争が現実味を帯びてくる中、操縦士その他の下級将校を大量かつ緊急に確保するため、学生生徒を予定より三ヶ月早く卒業させる「繰り上げ卒業」が実施された。翌年からは繰り上げ期間は半年となり、彼らは在学中に徴兵検査を受け卒業後直ちに軍隊に入ることとなる。卒業式は彼らの壮行会となり、陸・海軍は「学徒出陣」の言葉で学生を対象とする勧誘キャンペーンを展開していった。

そして昭和18年(1943)10月、ついに在学中の徴集猶予措置そのものが停止され、文科系学生を中心に多数の学生が卒業を待たず陸海軍に入隊する。「学徒出陣」の壮行会が全国各地で開催され、以後も昭和20年(1945)8月に至るまで多くの「学徒」が学業半ばにして軍に入り、やがて戦場へと向かっていった。

### ●繰り上げ卒業

#### 26. 昭和16年12月繰上卒業式での卒業生答辞文(抜粋)[パネル]

庶務部入試課移管文書『卒業式関係』

…我々の大多数は卒業と共に銃をとって一死奉公第一線に立つことでせう。銃後にあっても戦線にあってもどこまでも諸先生の日頃の御教訓を守り真に最高学府の卒業生として、更に栄えある我が東北帝国大学の誇りを持つ者として、此の時局を背負って立ち、他日の大成を此処に誓ふものであります…。

#### 27. 海軍予備学生の入隊式 - 『写真週報』

昭和18年10月20日号

『写真週報』は、当時政府が国策宣伝のために発行していたグラフ誌。この年海軍予備学生・陸軍特別見習士官に応募し合格した学生たちは、大学在学中のまま12月に入隊するいわゆる「学徒出陣」組より一足早く、10月1日付で陸海軍の部隊に入隊した。応

募者のなかには、高校卒業後すでに大学進学が決まっていた者も含まれていた。この記事では彼らを「学鷲」と呼び「敵の非望を破擢し皇国を富嶽の安きにおくは、君たち学徒の双肩にかかっているのだ」と結んでいる。

#### 28. 入隊した二人の卒業生からの生物学教室へのたより

『東北生物学同窓会会報』19(昭和19年1月)

・本三十日付を以て正式に海軍予備学生を命ぜられ、海軍軍籍に編入せられ愈々第〇〇期飛行予備学生となりました。今後は七生八死以て君国に殉ぜんのみ。(中略)…軍服も軍帽も長年の学生姿と共に大に宜し。××学生も元氣一杯、健闘を誓ふ。

・私共も愈々海軍軍人と相成り、士官として本格的の訓練を受ける事となりました。種々の服装を身につけ格好は出来上がりましたが今後益々努力致し、内容外観共に御期待に添ふべく邁進しよふと思ひます…

#### 29. 高瀬五郎監修・高戸顕隆述『学徒出陣』

昭和18年(1943)6月毎日新聞社刊

海軍報道部が大卒予定者を対象に、海軍予備学生への志願を呼びかけるため発行したもの。京都帝大経済学部出身という口述者が、アメリカでは学生が先を争って航空兵を志願し戦争に参加していることを引き合いに出し、日本の学生に奮起を促す、という内容となっている。発行部数は七万部という。

この年海軍では飛行科を中心に「予備学生」の大量募集を行い、陸軍もまた「陸軍特別操縦見



習士官」制度を創設して大募集を行っていた。どちらも大学や専門学校等の卒業予定者を主な対象としたものであった。

「学徒出陣」の語はこのような状況の中で、学生の自発的な入隊を促すための言葉として生まれたものであった（蜷川寿恵『学徒出陣』）。

### 30. 入中の学生からの書簡

昭和20年(1945)5月

鈴木廉三九文書

旭川の部隊にいる学生から、工学部鉱山学科の学生たちに宛てた書簡。「桜花咲き乱るの候、將に学業に將亦勤勞に頑張り居る事と思ひ独り考へ小生も諸氏及び銃後の皆様方に負けざる様頑張り居り候」云々とある。

#### ●徴兵猶予の停止—学徒出陣—

昭和18年(1943)秋、繰上卒業の卒業生を送り出したばかりの大学に衝撃が走った。それまで学生たちに適用されていた在学中の徴集猶予措置が廃止されることとなったのである。これにより、20歳に達したすべての学生は徴兵検査を受検することとなった。理工系の学生は合格しても卒業するまでの間軍隊に入ることを延期されたが、法文系学生の検査合格者はほとんど例外なく陸・海軍に入隊することとなった。

東北帝国大学ではこのとき全学で1663名が徴兵検査を受け、12月には法文学部に属する767名の学生が陸海軍へと入隊していった。徴集猶予の年齢制限を超えているなどの理由ですでに入隊していた一部の学生とあわせると、法文学部の入隊者は864名となり、同学部在籍者の約三分の二がこの時点で入隊していた計算となる。

### 31. 昭和18年12月時点での学生数・入隊者数表 [パネル]

…本号永田英明論文表2参照

### 32. [新聞記事]「心は早決戦場へ 紅顔に

### 闘魂漲る 東北大学徒出陣壮行会」

『河北新報』昭和18年10月9日

### 33. [写真] 東北帝国大学徒出陣壮行会

昭和18年10月8日撮影

河北新報社提供

### 34. 学生徴集猶予停止の件についての文部省から大学への電報

昭和18年9月25日

『教育ニ関スル戦時非常措置関係』

大学生等の徴集猶予停止については、九月下旬に既に新聞等で報道され関係者に衝撃を与えていた。電報ではいずれ文部省から指示があるのでそれまで学生の指導に万全を期し10月の新入生入学式も通例通り行うように、と指示している。

電文訳

二十三日新聞紙を以て公表せられたる情報局発表の件に付いては何れ本省より何分の指示これ有るに付き、御了知の上従前通り教授及び修練を継続し学生の指導に付き万全を期せられたきを以て本年十月より入学せしむべき学生の入学式、教授及び修練等は予定の通り実施相成たし

文部省専門教育局長

### 35. 朝鮮人・台湾人特別志願兵制度ニ志願セル学生生徒ノ取扱ニ関スル件

昭和18年(1943)12月3日

『教育ニ関スル戦時非常措置関係』

昭和18年(1943)10月当時、日本の植民地支配下にあった朝鮮・台湾では徴兵制が施行されず代わりに志願兵の制度が施行されていた。いわゆる「学徒出陣」に際し、朝鮮・台湾籍の学生には法的な兵役義務はないはずであったが、代わりに「特別志願兵」への勧誘が強力に進められた。勧誘は様々な手段を使って行われ、「志願」とは名ばかりのものであったという。東北帝大の在学生でも18年12月の時点で12名がこの特別

志願兵として入隊している。

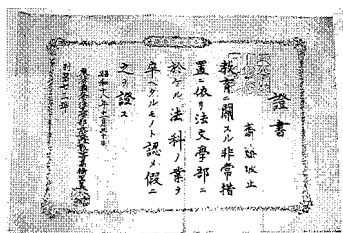
### 36. 仮卒業証書

昭和18年(1943)11月30日

齋藤敬止資料

昭和18年(1943)

10月に徴集猶予を停止され同年12月に陸海軍に入隊



した学生のうち、すでに相当の単位を取得し一年後の卒業が見込まれていた学生には、入隊前日の11月30日付で法文学部長名の「仮卒業証書」が発行された。

### 37. [新聞記事]文部省主催出陣学徒壮行会

『河北新報』昭和18年(1943)11月18日

河北新報社提供

東北帝国大学の壮行会とは別に、11月18日には東北・北関東・新潟地区の出陣学徒を対象にした壮行会が行われた。これは文部省主催の学徒野外連合演習にあわせて実施されたもので、演習には63校から一万人弱の学生が参加。東北帝大からは最大の566名(附属医学専門部等含む)が参加した。壮行式は演習終了後宮城野原練兵場(現在の宮城野原運動公園付近)にて行われ、文部大臣と熊谷岱蔵東北帝国大学総長の壮行の辞、在学生代表による送辞ののち、出陣学徒代表が答辞を述べた。その後全員で「海ゆかば」を斉唱。閲兵ののち解散となった。

### 38. [新聞記事]文部省主催出陣学徒壮行会

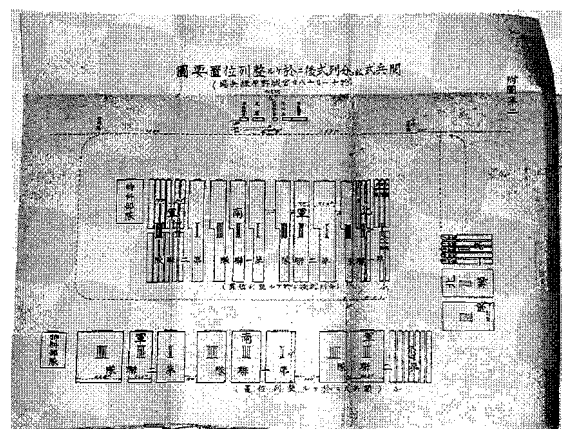
『河北新報』昭和18年(1943)11月1日

### 39. 出陣学徒壮行式の整列位置図

昭和18年(1943)11月18日

『昭和十八年度学徒野外連合演習実施要項』

文部省主催の出陣学徒壮行会は前日からの野外連合演習のあと閲兵・分列式に続いて行われた。図面下方の位置で閲兵を行ったのち、右方から左まわりで分列行進を行い、



図面中央の位置に整列、そのまま壮行会となった。ちなみに東北帝国大学の学生は仙台高等工業学校・東北学院等の生徒と共に北軍第一連隊に所属していた。壮行式では文部大臣その他の壮行の辞に笑い声やヤジを飛ばしたりする学生もいたという。

### 40. 熊谷岱蔵総長の出陣学徒壮行式祝辞原稿

昭和18年(1943)11月18日

総務部移管文書『昭和十八年度学徒野外演習及出陣学徒壮行会関係書』

### 41. [パネル] 出陣学徒の日記

昭和18年(1943)11月18日

中村金兵衛『青春の賦—学徒出陣前後』より

### 42. [パネル] 残留女子学生の日記

昭和18年(1943)10月5日

寿岳章子『東北通信』より

### 43. 出陣学徒に贈る歌

個人蔵

学徒出陣に際し、村岡典嗣法文学部教授が教え子の原田隆吉氏(のち本学教授)に贈った短冊。

あとうちて かえり来む日をまちてあらむ  
よみのこしゆく 千々の書はも

### 44. 徴集猶予停止に関する二高生の感想

昭和18年(1943)10月2日

忠愛寮(二高)日誌より

この日正式発表となった徴集猶予措置の停止を聞いた二高生が寮日誌に感想を綴った

者。徴兵適齢未満の高校生にとっても、自分たちの近い将来を左右するものとして、この措置は大きな衝撃を与えた。

#### 45・46 入隊学生の寄せ書き日章旗

昭和18年(1943)秋

鈴木幸壽氏および久禮田俊明氏提供

#### 47 ウィッドゴップ編・高橋健二訳 岩波新書『ドイツ戦没学生の手紙』

第一次大戦中のドイツの学徒兵の手記をまとめたもの。日本では昭和13年に翻訳年に刊行され、学徒兵となった学生たちを中心にベストセラーとなった。

#### 48 海軍軍医学校動員中の学生への卒業証書伝達に関する書類

昭和19年(1944)9月

『教育に関する戦時非常措置関係』

医学系の学生の場合、陸・海軍の依託学生や陸軍の短期現役軍医試験の合格者は、大学卒業を待たずその数ヶ月前に陸海軍の医学校に入校し、軍医としての教育を受けることとされた。大学在学中に軍隊に入隊する、という意味では、彼らもまた「出陣」学徒ということができる。彼らの大学卒業式は文部省が主催するかたちでそれぞれの軍医学校で行われ、各々の大学から派遣された教官が、持参した卒業証書を授与した。

#### ●入営を目前に控えた学生たちのレポート

中村吉治文書

- 49. 「感想」(池田重隆)
- 50. 「思ふままに」(鮎沢進)
- 51. 「世事雑感」(竹中幸郎)
- 52. 「感想」

徴兵検査に合格し入営を目前に控えた学生たちが、その心情や決意を綴ったレポート4点を展示した。

このレポートは、昭和19年(1944)7月に法文学部の「経済史」(中村吉治教授担当)

の学年試験課題として学生たちが提出したものと思われる。執筆した学生たちの多くは、前年秋に東北帝大に入学し先輩たちの「出陣」を見送っていた。そしてこの年彼らも徴兵検査を受検し、合格者は近く大学を離れ陸海軍に入ることになっている。「戦争」「軍隊」といったものを彼らがいかにして受け止めようとしていたのか。複雑な心情を綴った行間に私たちは何を読み取るべきなのか。

### Ⅲ 学徒勤労働員

法文系学生を中心とする「出陣」学徒を見送った残留学生たちは、昭和19年(1944)に入ると「学徒勤労働員」の徹底政策によって、大学にありながら教育を受ける時間を次第に失っていく。

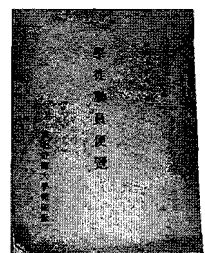
すでに夏休み等を利用した「集団的勤労働作業」というかたちで勤労働員は行われていたが、昭和19年2月の「決戦非常措置要綱」により学徒勤労働員の一層の強化が図られると、東北帝国大学でも工場等への通年勤労働員が行われるようになる。それでも当初は勤労働員は上級生を中心としており、下級生は一応授業を受けることが出来た。しかしその原則も戦局の悪化を前に次第に崩壊し、昭和20年(1945)4月からは学校での授業は全面停止。学生は学年に関わりなくすべて工場等へ勤労働員されることとなった。細々と維持されていた大学の教育機能は事実上停止され、大学は戦時研究機関と学生の「勤労働員」を行う機関へと、変貌を強いられることとなる。

#### 54. 『学徒勤労働員便覧』

東北帝国大学報国際

昭和19年(1944)10月

勤労働員の本格化に伴い、東北帝国大学報国際の名前で発行されたハンド



ブック。勤労働員に関する各種法令・通知が集成されている。

#### 54. [パネル] 東北帝国大学の勤労働員先

→別表4

東北帝国大学の勤労働員は、当初は上級生を中心とする原則をとった。理・工学部では三年生（最上級生）は専門や就職先等を考慮し各地の工場等に個別分散的に配置され、二年生は同じく専門を考慮しつつ技術教育の観点から集团的に配置された。中には軍からの委託研究を行っている学内の研究室を動員先とする場合もある。医学部の場合は軍医速成の需要もあり大学病院など病院・実験室等への集団配置を原則とし、一、二年生は授業を受けた。法文学部の場合は技術者としての動員が困難なため、軍需工場の労働力として数カ所に集团的に配置されることが多かった。

#### ●大学教師の視線－勤労働員と大学教育に関するアンケート

##### 55. 工学部教員の意見書綴

##### 56. 理・医学部教官の意見書綴

##### 57. 法文学部教官の意見書綴

昭和19年(1944)8月

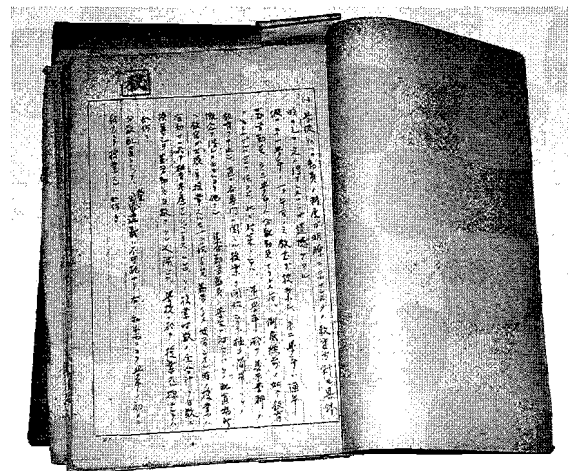
総務部移管文書

昭和19年(1944)8月、熊谷岱蔵総長は戦時下の大学における教育・研究、その他大学運営のあり方に関する各教官の意見を文書で提出させた。この意見書をまとめた冊子が、『東北大学百年史』編纂に伴う調査の過程で発見されている。

この年2月の「決戦非常措置要綱」に基づき、勤労働員の強化が矢継ぎ早に進められ、東北帝国大学でも上級生を中心に通年動員が開始されていた。当初はそれでも「教育の一環としての動員」という理由付けがなされていたが、7月には「学徒勤労の徹底

強化に関する件」の閣議決定によって勤務時間内の動員学徒への授業や工場休業日以外の登校が禁じられてしまう。

こうした状況を反映しアンケートでも勤労働員と大学教育をいかに両立させるかという設問が立てられており、当時の大学教員の考えをうかがうことができる。もちろん教員個々の立場によって意見も多様であるが、代表的、あるいは特徴的なものをいくつか抽出して紹介した。



#### ●原町・陸軍造兵廠への勤労働員

昭和19年(1944)6月、法文学部の三年生は、市内原町の陸軍造兵廠仙台製造所（跡地は現在の陸上自衛隊苦竹駐屯地内）へと動員された。前年秋に「出陣」を見送ったグラウンドで、今度は動員学生の壮行会が行われた。以後終戦まで、下級生が引継ぎながら勤労働員が続けられていく。

動員学生の仕事は、弾薬を製造したり動員されている中学生や女学生等の労務管理をしたりと様々であった。学生たちはそれぞれの下宿から一般工員と共に工場に通っていた。勤務時間後は大学に立ち寄る学生も多く、図書館も夜九時頃まで開館し彼らを受け入れていたという。

#### 58. [写真] 法文学部動員学徒壮行式

昭和19年(1944)6月3日

河北新報社提供

大学講堂前の広場での壮行式の様子。勤労働員の本格化に伴い、法文学部ではまず3年生が原町（苦竹）の造兵廠に動員された。

59. [写真] 法文学部学生集合写真

昭和19年(1944)～20年頃

原町陸軍造兵廠への動員学生か

60. [写真] 法文学部三年生の陸軍造兵廠退所記念撮影

昭和20年(1945)6月

61. 原町・陸軍造兵廠への勤労働員に関する工場側との打合せ事項

昭和19年(1944)9月

石崎政一郎文書

62. 原町出勤学生中の応召者壮行会への参加依頼状

昭和19年(1944)12月

中村吉治文書

原町への動員学生の監督責任者であった中村吉治教授が、清宮四郎・安井琢磨教授宛に壮行会への出席を依頼した文書。回覧後「出」の印を付けて中村教授の許に戻された。動員中の学生からも、召集され戦地に向かうものが次第に増えていった。

63. 春樹集

昭和20年(1945)

勤労働員中の法文学部学生が相互の連絡・親睦のために作成した回覧文集。題字は阿部次郎教授の筆。原町造兵廠と群馬・伊勢崎の中島飛行機工場に動員されている学生の間で回覧された。



64. 『春樹集』冒頭に寄せた阿部次郎の句

(複製展示)

開講も 餞となり あはれ哉

廊冷えて 講義なき梅雨に 入りにけり

65. 『春樹集』に記された学生の詩

(複製展示)

慰問の手紙を書けと 言はわれたが

その時俺は 自分の耳をうたがった

果たして俺にはそんなヨイウが

あるだらうかと

…無

●中島飛行機伊勢崎工場への動員

昭和19年(1944)10月に大学に入学した学生は、入学後三ヶ月で学年試験を受け、翌年一月から早くも動員されることとなってしまった。同級生の多くは既に学徒兵として大学を去っていたが、大学に残っていた約70名の学生が動員対象とされ、群馬県の中島飛行機伊勢崎工場へと派遣された。この工場は「零戦」「銀河」等の戦闘機を組み立てる中島飛行機小泉製作所への供給部品を生産する工場であった。

伊勢崎動員に関しては、当時の記録が豊富に残されており、動員の実態を詳しく知ることができる。

66. 中島飛行機伊勢崎工場への動員に関する工場側との打合せ記録

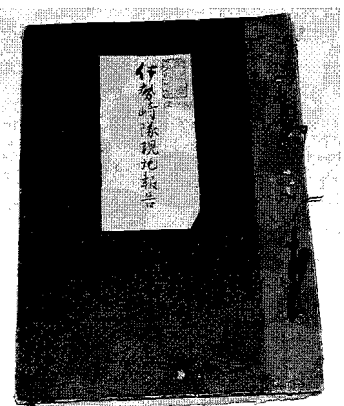
石崎政一郎文書『学徒勤労働員関係』

昭和20年(1945)1月

67. 伊勢崎隊現地報告

石崎政一郎文書

伊勢崎の勤労働員先には、助手・副手等の若手教官が交代で派遣され、その都度

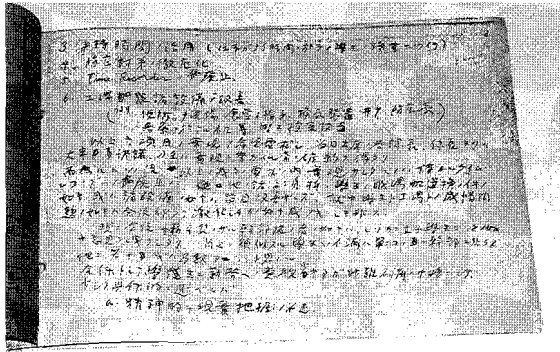


現状や問題点をまとめて報告書が報国隊本部に提出された。

#### 68. 勤労幹事所感

石崎政一郎文書

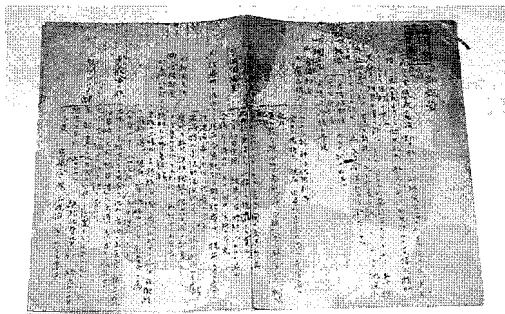
伊勢崎隊の勤労幹事に任じられた学生の意見・感想を記したもの。



#### 69. 生活部報告

石崎政一郎文書

伊勢崎隊の生活部担当学生の報告。動員学生生活に関する問題点が列挙される。



#### 70. 伊勢崎隊内務日誌簿

石崎政一郎文書

伊勢崎への派遣教官が交替で記した日誌。伊勢崎動員学生の毎日の状況を克明に知ることが出来る。

#### 71. [パネル]『伊勢崎隊日誌』から…

- 伊勢崎隊の八ヶ月（年表）
- 動員学徒入営－N君の場合（4月18, 21日）
- 「地下工場建設への動員」（5月12日）
- 最大の難問…食糧問題（6月13日）
- 疎開、そして空襲（8月2, 4, 15日）

#### ●理系学生の勤労働員

理・工学部学生の動員は、それぞれの専門性に即した工場や研究機関等へ動員する原則が採用された。文部省の意向で「勝手に」動員先を決められるのを防ぐため、大学側が事前に交渉し受入工場を決めることも少なくなかったらしい。文系と異なり個別分散的な動員が多かったが、比較的多人数での動員が行われたのは、やはり中島飛行機の諸工場（群馬県太田・小泉、栃木県宇都宮工場など）であった。そのほか陸海軍関係の工廠に動員された者も多く、遠く九州まで行った学生もいる。

#### 72. [パネル] 動員を間近にして…昭和19年の『工明会誌』から

昭和19年5月

先日、文部省から学徒動員が発表されましたが、一月を経ずして私共も何れかへ動員されることと思ひます。現在の私共には勿論未来を惟ふことは許されず、為すべきは現在に対する最善のみであります。然し、私共化学工学の将来に対する大きな夢を片時も忘れてはいけなと考へて居ります。（化学工学科二年生）

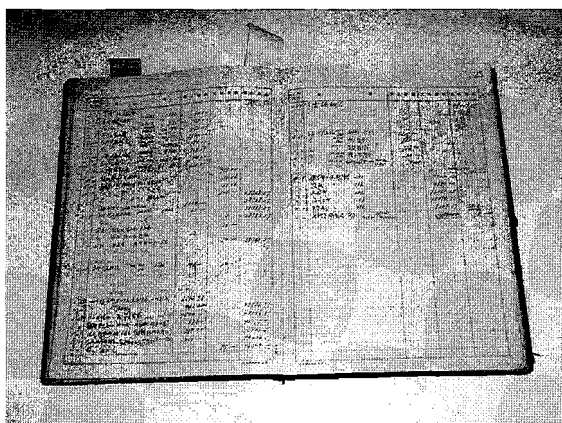
吾々一同思ひをここに致して、外界の事態を正視し、三年生の電波報国隊、音波報国隊出動の後、腕を撫して出動の日を待望しておりました。その待望の日は愈々五月中旬と決定、皆の意気展に沖するの感があります。先輩の皆様、刮目して成果を御覧ください。必ず必ず頑張ってみせます（電気工学科二年生）

法文学部の連中を送り出したのが最初の変動でした。壮行会も祖国の安危を担う若い情熱の彩りでした。学徒勤労働員が一時話題の中心でした。でも気を吞まれば致しませんでした。空いている時間は残らず充実させ、講義も先へ先へと進められています。（機械工学科一年生）

### 73. 東北帝国大学報国隊 会計簿

学生部移管文書

勤労働員が本格化する昭和19年(1944)6月以降の、勤労働員の報償金その他の収支簿。東北帝国大学の勤労働員は「報国隊」の活動として行われ、学生たちの報償金(給与)も報国隊経由で支給されるかたちをとった。帳簿には学生たちの動員先や報償金の支払い状況が克明に記され、理工系を含む全学の勤労働員の実態を知る貴重な資料。



### 74. 医学系学生に対する指導監督徹底に関する文部省の指示

入試課移管文書『教育に関する戦時非常措置関係』  
法文系学生が「出陣」し理工系学生も工場事業場等に出動しているのに対し、医学・歯学系学生が通年動員の対象から除外されているのは「医術の本質」と「軍医養成」のためであるとして、その趣旨に基づき指導監督を徹底するよう各大学に求めたもの。

### 75. 理学部生物学教室への動員命令書(写)

理学部生物学教室文書『学徒動員』所収  
生物学教室での研究要員として所属学生たちの動員を命じた文書。文部省や軍の委託研究を行っている学科・教室では、自らが「動員」先となる場合があった。また近隣の専門学校生等を大学に動員することも行われている。生物学教室の場合、片平の生物学教室のほか女川の水産実験所、青森県浅虫の臨海実験所等でも研究補助員としての学

生の動員が行われた。

### 76. ([写真]) 理学部数学教室への勤労働員女子学生

昭和19年6月

陸軍の委託研究を行っていた理学部数学教室に動員されていた、宮城県女子専門学校の生徒たち。

### ●学徒隊の結成

本土空襲の本格化、沖縄での激しい戦闘など、戦局が緊迫の一途をたどる中の昭和20年(1945)5月、「戦時教育令」が公布され各学校に「学徒隊」が結成されることとなった。

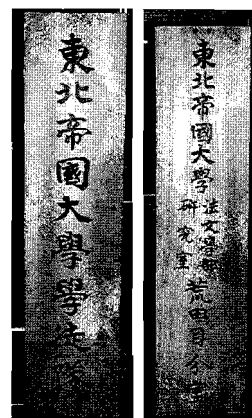
「学徒隊」はそれまでの「報国隊」を衣替えしたものであったが、これを非常時の戦闘部隊に転用することを想定していた。東北帝国大学でも従来の報国隊を発展改組した「東北帝国大学学徒隊」が、それぞれの動員先で結成された。

### 77. 看板「法文学部荒田目分室」

### 78. 看板「東北帝国大学学徒隊」

昭和20年5月

昭和20年(1945)4月に入学した法文学部の新一年生は、古川・中新田付近の農家に援農部隊として動員された。現地の荒田目神社(現在の大崎市)境内に集会場が設けられ、ここが法文学部分室兼「学徒隊」の事務所とされた。



### 79. 学徒隊結成に関する伊勢崎動員学生の報告

石崎政一郎文書『伊勢崎隊関係書類』

昭和20年7月2日



伊勢崎隊の学生から、責任教官である石崎政一郎に宛てたもの。伊勢崎では周辺地域の工場に動員されている学生、地域の学校の生徒らによる「小泉地区皇国学徒隊」なる組織を結成する動きが生じていたが、のち「戦時教育令」で学校や職場を単位に「学徒隊」を結成することとなり、この両者の関係をどのように整理するかが問題となった。陸軍ではこれを軍直属の意図する意向を持っているらしいが、学生たちは、「皇国学生隊」を文部省の学徒隊に統合してその管下に置くことを主張し石崎に相談している。



#### IV 空襲と大学

##### ●空襲に備えて

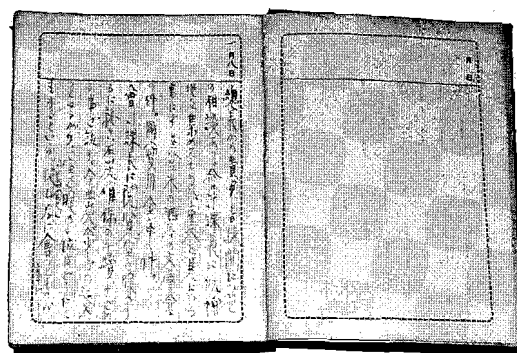
昭和19年(1944)末以降本土空襲が本格化する中、大学でも防空体制の整備が緊急の課題となってくる。東北帝国大学では昭和20年(1945)初め頃から防空壕の増設のほか、図書館その他コンクリートの建物の地下を利用した待避所を作る構想などが議論されており、「東北帝国大学地下疎開委員会」なる組織も結成された。

同時に研究設備や重要文書・図書等の疎開も学部ごとに行われ始める。しかし受入先との交渉、学内での疎開順位の調整など難題続きであった。

##### 80. 小宮豊隆図書館長の手記

昭和20年1月

当時図書館長であった小宮豊隆の手帳。貴重図書の疎開に関する記事がえる。



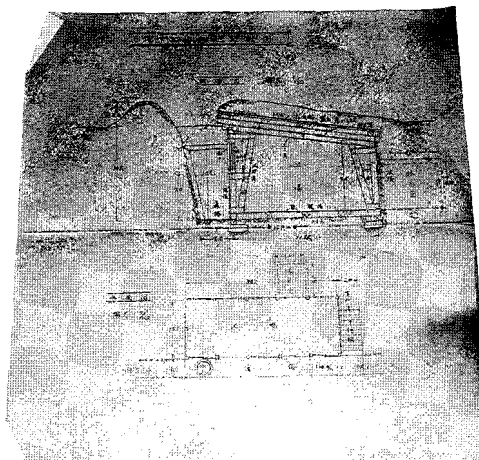
##### 81. [パネル]疎開に関する桑原武夫の回想

桑原武夫「文字村疎開記」

##### 82. 地下工場設計図

昭和20年

抜山平一文書



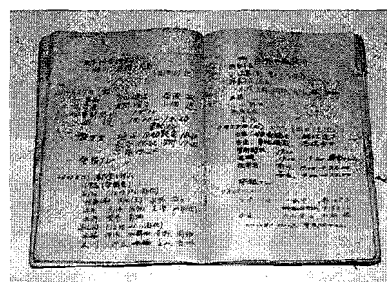
東北帝国大学営繕課が設計し、抜山平一教授が論文の中で公表したもの。「東北帝国大学地下疎開委員会」で検討されたものか。

##### 83. 理学部生物学教室 防護当番日誌

昭和20年4月

理学部生物学教室文書

防空壕掘りの作業に関する記事が毎日のようにみられる。疎開の出来



ない研究室等では、防空体制強化の一環として学生等を動員して防護当番制度を実施していた。

### ●仙台空襲

昭和20年(1945)7月9日、仙台市内は米軍機による大規模な空襲を受け、夜半から数時間にわたって爆撃を受けた。東北帝国大学の学生も、この空襲により、在学中の学生生徒8名と、川内の部隊に所属していた法文学部一年生1名が亡くなっている。ほかにも多くの学生が負傷したり、家族や住居を失った。大学施設では片平地区が最も大きな被害を受け、大学に残っていたり、動員先から帰っていた教職員・学生によって懸命の消火活動が行われた。それにもかかわらず、古い木造建物を中心に約4割の建物が失われた。

#### 84. 理学部生物学教室防護当番日誌

昭和20年7月

生物学教室文書

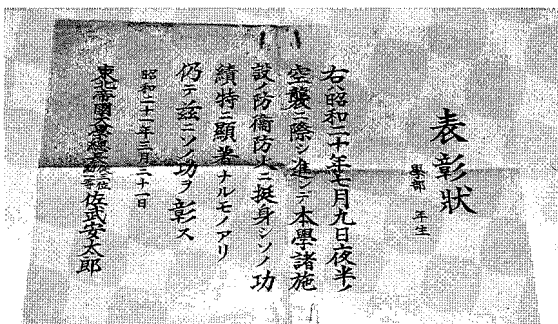
仙台空襲の日の記録。防火作業の様子が克明に記される。

#### 85. 空襲時防火功労学生の表彰状

昭和21年5月

学生部移管文書『雑件』

仙台空襲に際し学内での消火活動に従事した学生への表彰状。全学で184名の学生が表彰され、この賞状と大学ノート1冊が授与された。



#### 86. [写真]空襲で被災した理学部物理教室

昭和20年7月

現在の多元物質科学研究所科学計測研究棟N棟付近。理学部創設以来の赤煉瓦の建物は壁面だけが残ったが、その後修復され昭和30年代まで使用されていた。

#### 87. [写真]空襲直後の市内風景

昭和20年7月頃

旧工学部(現在の多元物質科学研究所素材工学研究棟)屋上から、北目町・東二番町付近を望む。塙の内側は大学の敷地内。

### V ふたたび、学園へ…

昭和20年(1945)8月15日、動員中の学生たちはそれぞれの動員先で、「重大放送」を聞くことを命じられ、ラジオで日本の降伏を知ることとなった。前夜空襲を受けたばかりの伊勢崎隊の学生たちはこの日、「憂国の念に包まれつつ」黙々と焼け跡の整理作業にあたったという。翌日には学徒動員の解除がラジオで発表され、学生たちは家族の安否や今後の行く末を案じつつ、それぞれの故郷に戻っていく。

8月28日、政府は新学期から学校の授業を開始することを発表。東北帝国大学では早速9月25日に戦後初の卒業式を行い、10月1日から授業を開始することとした。戦地から戻り復学した学生、動員先から帰ってきた学生、さらには他大学や軍関係学校からの転学生などが続々と学園に集まり、大学は徐々に賑わいを取り戻していく。

### ●敗戦から…

#### 88. 詔書謄本

昭和20年8月14日

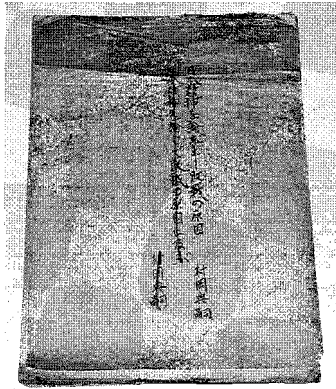
ポツダム宣言受諾を国民に宣言した詔書。8月14日に発布され当日録音された天皇の「玉音」が、翌日ラジオを通じて放送された。

### 89. 村岡典嗣手稿「日本精神を論ず—敗戦の原因」

昭和20年8月24日

村岡典嗣文書

昭和20年9月、戦地や動員先から帰ってきた学生たちが集まり始めた頃、法文学部の教官が中心となって「終戦記念講演会」



が十日間にわたって開催された。この原稿は、この時の村岡教授の講演「日本精神を論じて敗戦の原因に及ぶ」をもとに、村岡自身がまとめたものである。

### 90. 海軍工廠から譲り受けた食器

昭和20年8月14日

敗戦後、物資不足に悩む学校では旧軍施設からの物資入手に奔走した。この食器は松島の海軍工廠から学生課の職員が譲り受けてきたもの。



### 91. 防空壕取り壊しに関する通知

昭和20年12月

鈴木廉三九文書

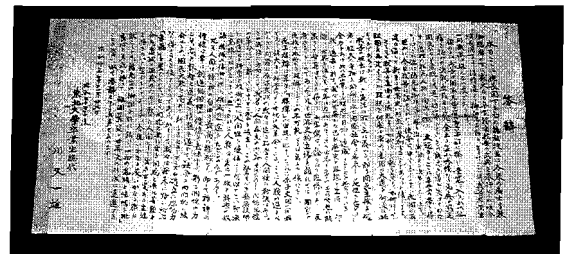
進駐軍司令部からの指示による防空壕取り壊し命令の通知。当日の内に取り壊せ、との命令。

### 92. [写真] 東北大学中央講堂

もと仙台高等工業学校の講堂として建築。のち東北帝国大学に移管され、昭和18年に大学の中央講堂として大幅に改造された。出陣学徒壮行会など戦時下の大学の重要儀式に使用されたが、敗戦直後は市内でも数少ないホールとして学生たちの様々な活動に使用された。のち大学生協公孫壽食堂として使用されたが現在は解体され存在しない。

### 93. 昭和22年度卒業証書授与式総代答辞

自らも出陣学徒として戦争を体験した学生が、戦中から戦後の激動の時代の中での価値観の変革、原爆に代表される科学文明の意味などについて触れながら、新時代の人間として生きる決意を述べている。



別表1 東北帝大の主な勤労奉仕 (昭和13年～18年)

年代	内容	日数	人数
1938年	評定河原グラウンドの建設	一ヶ月	
	増田村飛行場 (現仙台空港) の建設	3日間	のべ1500人
	蔵王登山道の改修 (山岳部)	8日間	のべ30人
1939年	興亜青年勤労報国隊への参加 (中国東北部へ)	50日間	のべ54人
	護国神社 (仙台) 造営工事	3日間	のべ4008人
	護国神社造営勤労奉仕隊への救護活動	16日間	3人 (のべ48人)
1940年	興亜青年勤労報国隊への参加 (中国東北部へ)		20人
	炭焼き	9日間	50～100人
1941年	造林作業 (岩切)	10日間	
	応召家族の農耕作業の手伝い		30人
	医療活動 (東北地方五ヶ所/医学部)	32日間	41人
	興亜青年勤労報国隊への参加 (中国海南島へ)	54日間	7人
	水害復旧堤防修築作業 (岩沼/法文学部)	2日間	
	仙台師団での兵器の運搬 (法文学部)	2日間	
1942年	興亜青年勤労報国隊への参加 (中国東北部へ)	14日間	
	結核調査	14日間	10人
	仙台市や営林署などでの運搬作業等		700人
	矢本飛行場での労力奉仕	14日間	758人
1943年	仙台師団兵器部における女子学生による銃 の手入作業		
	渋滞した貨物の運搬 (塩竈)	6日間	100人
	結核調査	14日間	10人
	特別炭坑調査隊への参加 (工学部)	5日間	
	鉾山開発調査の補助 (理学部)		10人

※『評議会記録』、『東北帝国大学学報』、『河北新報』、石崎政一郎文書等による

※表には実施資料・計画資料にみえるものが混在しており、実施されたか未確認のものも含む

別表2 応召者数の推移

年代	学生 (大学院生含む)	教員 (助手・副手)	事務・技術系職員
1937年	16	35	45
1938年	27	40	22
1939年	11	29	28
1940年	7	10	12

※『応召者関係調』(東北大学史料館所蔵)による

別表3 戦没者数の推移（慰霊祭での対象者数の推移）

戦没年	人数	所属・身分
1937年	1	工学部助手
1938年	4	医学部副手／法文学部学生／理学部・金属材料研究所職員
1939年	7	理・医学部副手／本部職員
1940年	5	医学部副手／本部職員
1941年	1か	附属医院職員
1942年	7か	医学部副手／医学部・病院・金属材料研究所職員
1943年	6	医学部講師・副手／金属材料研究所職員
1944年9月以前	9	医学部副手／病院職員／大学院学生／理・法文学部学生

※『東北帝国大学学報』による

別表4 学外の主な動員先工場（判明した分のみ）

工学部	中島飛行機小泉製作所・太田製作所（以上群馬）・宇都宮製作所（栃木） ・津上製作所（新潟）／日立多賀工場・日立工場（茨城）・亀有工場（東京） ／日本特殊鋼羽田工場（東京）／日本無線三鷹工場（東京）／保土ヶ谷化学郡 山工場（福島）／第一海軍技術廠（神奈川）／第一海軍火薬廠（宮城・船岡） ／海軍第一航空廠（茨城）／陸軍多摩技術研究所（東京）ほか
理学部	日本曹達二本木工場（新潟）／東北金属諏訪製作所（宮城）／日本化学工業郡 山工場（福島）／呉海軍工廠（広島）／佐世保海軍工廠（長崎）ほか
法文学部	陸軍東京第一造兵廠（宮城・仙台）／中島飛行機伊勢崎製作所（群馬）ほか

※『東北帝国大学報国隊会計簿』等による。

